

特別寄稿

訓下・加註

作法集伝授要意 元瑜編（4）

布施淨慧

特別寄稿

第二十五	兩界合行作法……………	二
第二十六	四種護摩記……………	四
第二十七	土公供……………	一一
第二十八	行法中間立座作法……………	一四
第二十九	字輪觀……………	一六
第三十	小野廣澤相違……………	一八
第三十一	孔雀經御読経発願……………	二一
第三十二	齊王作壇略作法……………	二七
第三十三	大法護摩壇作法……………	二九

特 別 寄 稿		
第三十四	呪願……………	三二
第三十五	泥塔供養作法……………	三四
第三十六	修学土代……………	三六

〔作法集〕

第二十五 両界合行作法

秘抄
作法集
下卷ノ文
師伝に云く、道場觀の時、金剛界諸尊の心中に八葉の諸尊を觀ず。若し胎藏に拠らば、諸尊の身中に月輪を觀じ
三十七尊を觀ず。

本尊加持 両界大日

正念誦 不二の明 両界合行の事

其の作法多しと雖も、両界供養の時、此の如く用うべきなり。

〔伝授要意〕

両界合行作法

此れは『秘抄』の作法の卷の下の終りに出す。此の作法は、野澤共に印可曼荼羅を供養の時の¹所用なり。行法は偏えに金界の大法を修し、両界供養の事有り。

金剛界諸尊心中等

金界の道場觀了つて、また金界大日の心中に胎藏八葉九尊の種三尊の転成を觀ずと。^云

【若胎藏者等】

野澤共に胎藏に合行の作法無し。而れども金界に准せば道理有る故に、これを挙げてその軌轍を

示すなり。

【本尊加持】

両界の大日

此に口傳有り。縦い²受者は初重伝授の人たと雖も、而も大阿は、初重分の者は、両界各別の言を誦し、二重分の者は第二重の五智五阿を誦し、三重分の者は第三重の不二の真言なり。

此れは醍醐の本流嫡伝の人の大阿の事なり。其の余は初重分の故に、両界各別の真言を誦するなり。然るに因縁に依つて、二三重伝授の人は意に随い誦すべし。

【不二明】

『秘抄』裏書に云く。

阿¹阿²ア³ア⁴

普通

阿¹阿²ア³ア⁴

秘密

師の云く。阿¹阿²ア³ア⁴は五大の種子。五大即五智輪の故に不二の明なり。而も此れは初重の分なり。是の故に普通にこれを授く。阿¹阿²ア³ア⁴は第三不二の言の故に、本流はこれを用う。云々

註1 所用 この作法は印可壇を莊嚴し、一流伝授、大曼荼羅供、奥の疏講伝、或は伝法灌頂の時に大阿所修の法である。

註2 受者 大阿はこの作法散念誦の中間に受者を引入して印可する。その口伝が述べられている。

〔作法集〕

第二十六 四種護摩記

増益法 (東に向つてこれを修す)

藥種 (天門冬、桂心、地黄、呵利勒、杓杞)

相応の句 補瑟微迦 曩莫

加持物 (粳米の丸) 又は白米を黄に染めてこれを用う。

加持物観念 此の粳米丸供、本尊の御口より入つて、心蓮華台に至つて無量の如意宝雲海となる。一一の毛孔より流出して、盡虚空界の諸佛菩薩に供養す。便ち還り来つて我れ及び彼の施主の頂上に旋轉して、無量の珍宝資具を雨らし、所求の事 所願悉く成弁す。

薪 (黄木)

乳木 (五茄木 穀木 桑木、黄木。長さ四指、或は十指なり)

火天 (黄色) 本尊 (同) 衣服 (同) 一切余物皆黄色なり。

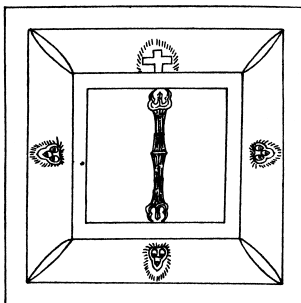
入護摩 先ず大日、次に宝生尊 次に本尊等の印、種子は唵字なり。芥子

加持には軍荼利の言を用う。

敬愛法 (西に向つてこれを修す)

藥種 (相思子 呵利勒、天門冬 荳蘇 紅華) 相応の句 縛試迦羅拏 斛

加持物 (団丸、米の粉を赤く染めてこれを丸む。又は白米を赤に染めて



特 別 寄 稿

これを用う)

加持物観念 此の団丸供、本尊の御口より入て心蓮華台に至って無量の蓮花箭雲海となる。一一の毛孔より流出して、虚空法界諸佛菩薩に供養す。便ち還えり来って我れ及び施主の彼此等の憎悪隔別厭離菩提の心を射拂い、彼此一体和合して、互に無二敬愛の心を起さしむ。

薪(ハナノクサキ)
(花木)

乳木(ネムリ)
(合昏木、桑木、穀木、花木 長さ十指或は四指)

本尊 (赤色)

火天 (同上)

衣服 (同上) 一切余物の色皆赤色なり。

入護摩の時 先ず大日、次に無量寿 次に本尊等の印

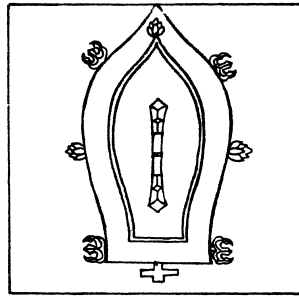
調伏法 (南に向つてこれを修す)

藥種 (附子)ヤスリノウス 鉄末 荊 酢、塩

相応の句 アビシヤロキヤ 阿毘舍盧迦 吽発吒

加持物 カラシノミ 黑芥子、アザミ 供花、クサキ 薺木

加持物観念 此の芥子供、本尊の御口より入つて心蓮華台に至って無量の利劍雲海となる。一一の毛孔より流出して、盡虚空法界の一切の忿怒尊に供養す。還えり来って我れ及び施主を加持護念して、厭媚呪咀、四大鬼業、惡靈邪氣の病を摧破し消滅して、安穩快樂を得せしむ。



種子 吽 芥子加持 (馬頭)

特 別 寄 稿

薪（毒木）

乳木（恒山木クサキ） 桃木ハシバミ、毒木 長さ八指両頭三角形なり）

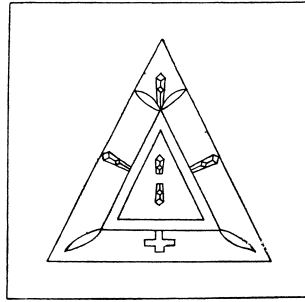
本尊（黒色） 皆忿怒形

火天（黒色） 皆忿怒形

衣服（黒色） 一切余物色皆黒色なり。

入護摩の時 先ず大日、次に不空成就印等

右梗概を注すのみ。委しくは本書次第等に在るべし。息災の如し。五宝、五香、五穀等息災に通用すべきなり。



種子 覽字

芥子加持（降三世）

鉤召の観念 弱の上に於て彼の人名を加えて即ち想え。本尊の心外遍身より無量の金剛鉤を流出して、盡虚空一切の

佛賢聖に供養す。即ち此の鉤は三惡趣の有情を召して人天の善所に安置し、即ち此の衆の鉤を以って彼の人心に入
れ、屈婁草クッロン草を召来して、本尊の口より入って心蓮華台に至って、金剛甲冑ミクサとなる。一一の毛孔より甲冑雲海を流出し
て、盡虚空界の諸佛、菩薩、緣覺、声聞、及び一切世天等に供養す。而も彼の自他をして金剛の壽命を持たしむ。本
尊天の甘露を流出し、自他の五体威光色力を増益す。

屈草シバノ

屈婁草クッロン草

御本に云く、貞応二年四月二十五日書写し了る

写本は持宝院僧正御房の所持云

同五月七日 三宝院経藏の勝俱胝御本を以って交点し畢る。

〔伝授要意〕

¹ 四種護摩記

印融の云く。此の次第の作者いまだ勘へざるなりと。宜なるかな。『²諸尊要抄』十四に四種護摩の説を出すと雖も
今と異なれり。彼れは息災、増益、敬愛、調伏の四種なり。また心覺の『鵝珠抄』の四に、四種説 行者の衣、本尊
の色、並びに供養の具を挙げと雖も、鉤召の説を加えず。『開心秘決』第七に四種護摩の大意を述べと雖も 全に取
り難きものか。

増益法、向東修之

『壽命経軌』(不空五右)

に云く、「若し増益富饒の法の者は、東に向くと」東は日初て出る方なり。

日光纔に顕れば萬像此に明かなる故増益の方なり。

【天門冬等】 何も氣血を増益する補劑なり。

【補瑟微迦囊莫】 發々無く、真言は囊莫にておさむるなり。

【乳木 黃木】 慈順僧正の考えに云く。『護摩事抄』中^(九)に、延命院の『四種護摩抄』を引くに、菓木を作る。次

下の敬愛の下の花木に菓の字可なり。黃は恐くは写誤

【皆黃色也】 黃色は物をフヤスト。云々

【次宝生尊】 此れは部主加持なり。醍醐には部主加持を略す。大日は普門の故に、大日加持に部主加持を兼ねる故

なり。『護摩事抄』下^(七)に云く。「今用いる所は、部主の印言これを結誦せざるなり」と。是れ即ち三宝院相承の

口説と見たり。(余の三種の法もこれに准じて知るべし。)

【種子庵字也】 三形は宝珠(或は三古) 炉の底には或いは三形、或いは種子これを書く。

【芥子加持用軍荼利言也】 師伝にて不動の真言を用う。両部弁事の尊の故なり。諸加持皆同じ。『諸尊要抄』十四

増益の下は、芥子加持に軍荼利の小呪を用うと。此勸流の意か。

3 【敬愛法 向西修之】 西は入日の故に敬愛なり。『壽命經軌』に云く。「若し敬愛ならば西に向く」4 『諸尊要抄』に云

く、四に敬愛 蓮華部西に向いてこれを修す。一切の時にこれを修す。

【藥種】 『諸尊要抄』に同じ。

【相思子^{ヒサキ}】 とは、又ヒサキとも云う。『護摩事抄』中^(二)「敬愛の五藥は、人參、茯苓、天門冬、石昌蒲、牛黃」と

文えり。大いに相違す。尋ぬべし。

〔箭雲海〕 箭は愛菩薩の三形の故に。

〔乳木 花木〕 『要抄』に云く。赤色の花木。通説は梅桜等

〔次無量寿〕 部主

〔種子卍〕 卍の底に、或いは独古、或いは種子⁵

〔卍図〕 此れは一乗の卍なり。略法なり。丁寧には八葉の卍なり。元々按ずるに『要抄』は此の図と異なるなり。四方に三古形有り。其の中間に三方蓮花有り。〇〇形。

〔調伏法 向南修之〕 南は火大極陽の方の故に。三角火輪に相応す。『壽命經軌』に云く。若し調伏ならば南に向く。

⁶〔瑜伽護摩軌〕（初左）に云く、まさに面て南にして而も住して以って降伏の事を作すべし

〔塩〕 インヨウエン
ヒシキノシヨ 引生⁷塩⁷

〔加持物等〕 『護摩事抄』中（九左）に云く。「私に云く。護摩には加持物を最要となす。調伏には微妙の物とて種々の毒物を合わせ用うるなり」今三種の毒物を挙ぐるは合藥の意か。

〔乳木〕 『事抄』中（左）全同。但し檜を檀に作る。『要抄』亦檀に作る。

〔皆黒色也〕 黒は忿怒の形。

〔次不空成就〕 部主。即ち釈迦牟尼佛なり。

〔鈎召〕 『瑜伽護摩軌』（左初）に云く。「仰ぎ視て諸方に遍するを鈎召の儀とす」又（右四）云く。「鈎召皆赤を用う」

〔於弱上等〕 元々謂く。已下「召来」に至る五行余の文は、『瑜伽護摩』（左七）鈎召の下の全文なり。洞泉和上の云く。

「加持物の前に大鈎召印をもって、某弱其弱某弱と三反卍中へ鈎召して此の觀を成すなり。」

屈草 屈婁草

同じ物なり。

持宝院僧正御房

覚洞院⁸勝賢なり。本尊如意輪の故に持宝院という。如意輪の金剛号を持宝金剛と云う故なり。

註1 四種護摩 祈願の目的に依り修法の護摩供を五種に分ける。『大日聖』世出世護摩法品所説の、息災・増益・調伏の三種と、

『火畔供養軌』所説の敬愛、更に『瑜伽護摩軌』所説の鈎召の五種である。今作法集は、この五種の中、増益・敬愛・調伏・鈎召の順に要点を説いている。息災についての一段は設けていないが、本文調伏法の文中に、「息災の如し」とあるによって息災の認識はある。

註2 『諸尊要抄』正蔵^⑧三三三bに鈎召を省いた四種が記述されている。

註3 傍註 炉の図『諸尊要抄』は四角に三昧耶形これあり。また三弁宝珠、正方にあり。直前の方は炉の柄なり。

右の文傍註の如き記述であるが、炉図の説明本文の加筆。

註4 『諸尊要抄』正蔵^⑧三三四b

註5 傍註『瑜伽護摩軌』(左^初)に云く、長き連華形に作るは敬愛に相応す。正蔵^⑧九一六a

註6 『瑜伽護摩軌』正蔵^⑧九一六b

註7 引生塩 不詳 性善口伝、印融口訣に共に考證無し。

註8 勝賢(二三六)の通称は侍従・覚洞院などが知られている。こゝに持宝院僧正とある。晩年諸職を辞し、方丈の草菴を構えた。

送老の栖とし以って終身の地として上醍醐斗賀尾の一院は、最初は如意宝珠を安置せるが故に持宝主院と名づけ、丘東院が後に覚洞院と呼ばれるようになった。(『日本密教人物事典』上巻三七一頁所説。著者柴田賢龍師は、この説は、金沢文庫蔵の『仙芥集』定仙撰に出ずと紹介している。)

〔作法集〕

土公供 貞觀寺 二十七

内題 地天供作法

先ず供物加持（小三古印 枳里枳里呪 二十一反）

次に同印をもつて「字」を誦じて加持 二十二反

次に地天印真言（鉢ノ印）ビリチビエイ ミミロウミヤミ

次に驚発地神の偈 三古を取り抽擲す

次に地神勧請の頌 金剛合掌

唵ボダマイチリバザアラキシャカン沒駄每底里嚩曰羅々乞叉ハ舎ン 二十一反

次に如來拳印 唵保欠 二十一反

當年月日 姓丸居住の由祈願

次に散供

次に三礼

次に如來唄

次に表白

次に發願

次に四弘

特 別 寄 稿

特 別 寄 稿

次に心経 三卷

次に祈願

次に有為法 誦うべし 空觀に入るべし

次に地天真言 百反

次に如來慈護真言 百反

唵^ボ母^ダ駄^マ摩^カ訶^マ妹^イ奈^タ羅^ラ阿^ア乞^キ叉^{シャ}輪^{カン}

次に大日宝号 百反

次に釈迦宝号 百反

次に地藏宝号 百反

次に觀音宝号 百反

次に地天宝号 百反

次に祈願

次に三力

次に廻向

次に澆遣

唵^バ嚩^ザ囉^ラ保^ボ乞^キ洒^{シャ}穆^{ボウ}

勸請地神偈

汝天親護者 於諸佛導師

修行殊勝願 淨地波羅蜜

如破魔軍衆 釈師子救世

我亦降伏魔 我畫曼荼羅

已上土公供作法 貞觀寺僧正御伝

〔伝授要意〕

土公供 ¹貞觀寺

此の次第は貞觀寺の説なり雖も、今時は²元海僧都の次第を用うる故に、読渡すまゝのみ。

禁裏公方家、並びに堂舍佛閣造営の時は、地鎮々壇法を修し此の法を修せず。佛家に於いては坊舍、在家に於いては常の家屋造立の時、いまだ造立せざる已前に、建つる所の地に於いて此の作法を修す。

先ず立つる所の地の中央に、清浄の土をもつて三四寸計りの、廻り二尺四方計りの壇を築き、壇の前に新しき莚を敷き、その上に半畳を設け導師の座とす。

〔驚發地神偈〕『3擇地法』(左四)に汝天親護者の八句あり。下に『4観智軌』(左六)に出す。

〔可入空観〕⁵一切有為法如露亦如電を誦し、まさにこの如是の観を作すべきの間に空観に入るべきなり。別にはこれ無し。

〔妹奈羅〕前には⁶底里と云う。豎の相通意ならん。

稿 別 寄 特

註1 貞観寺 真雅^(八〇) 住居貞観寺（創建貞観四年（八六二）に因む）

註2 元海僧都の次第 元海^(一〇九三) の『厚雙紙』に出さず。未見

註3 『擇地法』『大日聖』の作坦法の曼荼羅建立の過程を説いた後この偈を出す。正蔵¹⁸九二七a

註4 『観智軌』これも同じく作壇に付随して出す。正蔵¹⁹五九五b

註5 一切有為法 この文は塚本賢暁師の国訳に「金剛經の偈なり」と註している。（国訳密教 事相部第二卷四八八）

註6 傍註に「底」の右側に「タチツテト」「里」の左側に「ラリルレロ」

「前に」とは本文の「驚発地神偈のところに示す真言のこと。真言の「底里」につき、後に出す「如来慈護真言」では「妹奈羅」と表記し相違について意見を述べている。

この真言を誦すれば諸天の威光を増し、行者の災難を除く故に、一切天等の供養法に通じて加え用う。（密辞解説文 真言は『観智軌』（正蔵¹⁹五九五a）に出す。庵没駄每怛哩嚩曰羅略乞又憾

〔作法集〕

行法中間立座作法 二十八

内題

行法中間立座作法

行法の間、要事に依って立座の時、五古印を結んで~~ス~~字を誦し、然る後却去。

已上作法集

或る伝に云く。念誦の時要事有って座を立ち出る時、念珠を蹠^{フダ}て壇上に安じて出るべし。云

〔伝授要意〕

行法中間立座作法

¹此の初めの立座の法は、心覚の『作法集』第二に多説を出す中の一説なり。

²〔或伝云等〕 此れは行者の代りに念珠を置くなり。醍醐にも他流には礼盤の上に扇を置き、其の上に念珠を置く者有り。或は袈婆を置く者も有り。

而るに当流は、外五古印に~~を~~を誦するなり。

師の云く。古き伝に云く。外五古は五大、~~は~~は識大の種子の故に、六大無碍常瑜伽なれば、立居俱に瑜伽の故なりと。

師因みに伝えて云く。³行法の中間に要語有らば、舌の上によ字を觀ぜよ。火災と成つて雜語を燒淨すと。〔開心秘決〕に出す元祖の伝なり。印融これを引く。云々)

カ月の仰せに云く。⁴持明房『柿袋』の無垢淨光の法を考うるに云く。行法の時若し要語有れば~~を~~字を舌の上に誦すれば失無しと。

元々按ずるに、此の一事心覚の『作法集』第二に、『台の軌』並びに『一字頂輪王念誦儀軌』等の本説を引く。^{云々}源と佛説より起れり。

註1 此の作法は現今用いられる例としては、伝法灌頂両界の大阿作法中に行ぜられている。即ち小壇所作法を行ずる為、散念誦の前にこれを結誦する。但し現行次第では用いる真言は、金界では「うん」字七反、胎界では「のうまくさまんだばだなん

稿 寄 別 特

うん そわか」と相違している。

註2 傍註

『疏』第四(二二三)に云く。阿闍梨座位を移して檀門の外に出るには、まさに佛室の位において、意所樂の尊を置き、或いは般若經を置き○或は所持の数珠若しは金剛杵、金剛鐸を置くべし。(正蔵³⁹六二三a)

註3 この部分の訓読は、性善の口訣の読みに従った。

註4 持明房 真譽(一〇六八^{一三}七) 持明院流祖覺鏤上人の法兄。著作口訣は「柿袋」(柿色の袋に入れ秘蔵に因む) 諸尊法中最古の口訣書と評される。

この一条の文、正蔵⁷⁸一九〇a

〔作法集〕

字輪観 五大 二十九

内題 字輪観 五大

端身正座して定印を結び、法界体性三昧に入つて観ぜよ。

我が心月輪の上に^レ𑖀𑖄𑖄𑖄𑖄𑖄の五字有り。右に旋りて住す。而も順逆に五字を誦じて、次に其の字義を順逆に観じ廻らせ。即ち

𑖀字諸法本不生なり 𑖀字諸法本不生なるが故に𑖀字自性離言説なり 𑖀字自性離言説なるが故に𑖀字清淨不可得なり 𑖀字清淨不可得なるが故に𑖀字因業不可得なり 𑖀字因業不可得なるが故に𑖀字等空不可得なり(これ順観となす)

何字等空不可得なるが故に、**了**字因業不可得なり、**了**字因業不可得なるが故に、**了**字清淨不可得なり、**了**字清淨不可得なるが故に、**了**字自性離言説なり、**了**字自性離言説なるが故に、**了**字諸法本不生不可得なり（これを逆觀となす）
遂に**了**字本生の理に住して言亡慮絶すこれを無分別觀と名づく。この觀に住し了って、乃ち定を出すべし。

師主の仰せに云く。此の字輪觀とは諸尊法の時自ら用ゆ、五大の字輪とは金剛界の如くにこれを觀念せしむべしと雖も広莫なるに依つて聊か初心の行者の爲、故僧正この如く略抄せらるるなり云々

〔伝授要意〕

凡そ¹字輪觀に通別有り。通とは諸尊に通ず五大を觀ず。此にまた廣略有り。廣は両界の次第の如し。略は今の記の定めなり。別とは或いは其の尊の心呪（²愛染法の如し）或は其の尊の種子（³不動法**了**字の如し）是れなり。

〔而順逆誦⁵字〕 心月輪の上に分明に五字の相現するに至つては、幾辺も順逆に誦すべし。字相了々に現せば字義を觀ずべし。

〔師主仰云等〕 印融の云く。已下は後人憲深の詞を奥書にするなり。親快奥書か。

〔廣莫〕 莫は博の借音か。

註1 字輪觀は本尊の意密と行者の意業と本来融會不二を觀想する（密辭解説文）もので、意密成佛の境界の秘觀とされる。
註2 愛染法 愛染一字心呪の「^{ウシタキウシヤク}咩橘枳咩弱」の真言を觀する。『薄』の愛染法の字輪觀は、「咩（因業）橘（橋慢）枳（作業）咩（了）」

稿 寄 別 特

義)弱(遷変)不可得を順逆に観ずる。正蔵⑦六七九

註3 不動法 種字を、因業、果位、因果の不可得を觀じ、生死涅槃無別に至り、本尊と自身の隔て無きこと実感し、その功德として大自在力、大堅固力を得悉く自他の怨敵魔縁を摧破し、大菩提直道を円満すと観想する。(正蔵⑦六七五取意)

〔作法集〕

小野廣澤相違 (思い出すに隨い 少々これを書す。猶々追つて書くべし) 三十

内題

醍醐仁和の相違

一、灌頂三摩耶戒上堂

醍醐には右繞 仁和には左繞 但し近代は皆醍醐も左繞^{云々}

一、無言行道 醍醐には小金剛輪の真言 仁和には降三世真言(正流は無言)

一、高座加持 (醍醐にはこれ無し。但し近代これ有り。仁和にはこれ在り)

一、惣礼 (仁和には大阿闍梨声を出し惣礼と云う)

一、後夜偈 (醍醐には読まず。仁和にはこれを読む。但し此の事然らず^{云々} 権僧正これを用う^{云々})

一、大法伴僧張文

醍醐には名を先に書き、官を次に書く。

仁和寺には官を先に書く。

一、如金剛幢トウニ和
タウ西及普賢

一、大法に小壇は仁和には火舎の蓋、醍醐には打ち鳴しこれを置く。

一、大法の時（經法）切り灯台 仁和には大阿闍梨の読經の灯台支度に出す。

醍醐には切り灯台は、伴僧二十人計りなり。大阿闍梨は大壇の灯台を讀經の時これを取り寄するか。

一、鎮壇の輪楸 醍醐には八なり。仁和には一つこれを用う。略儀か。

一、仁和には供養法の時、左の袖の内に印を結ぶ。醍醐には右袖内にこれを結ぶ。

御本

延慶元年十月二十九日夜
（一〇〇〇）

遍智院僧正自筆の御本を賜い筆を馳し了

真玄

〔伝授要意〕

小野廣澤相違

〔右邊左邊〕 西院八結の内、第六結に『貞記』に云く、行道の時大阿闍梨正面より左に退いて師子床に登る。如何ん。

唐の式に任さば右邊なり。一に是れ如何ん。大師の言く。我れ帰朝の後資の為に壇を建つ。五瓶を洒ぐの日青龍和上香品を執り、座の右に影現す。爰に頭面拝礼し、左に退く例なり（末世後世、門徒これに依るべし。伝散する勿れ

弘仁^(八二一)十二年仲夏の月二十一日 これを注す

又右邊の事 『薩婆多毘比毘婆沙』 五^(左)に云く、頭面礼の右邊とは佛法に順ず故に、所以に右邊す。また「密述力士若し左邊の者有らば、即金剛杵をもつてこれを砕くと

醍醐小金剛輪真言』 『真浴雜記』 十三(八十二章) 報恩院の伝に云く、行列の時は左手珠数・独古を持し、右手扇を持つて無言行道の時、左独古を右手に取り移して扇に取り具し、豎にこれを持す。独古袖ク^不ミにこれを取り、加持の義無く、又真言も無しと。又第二十(四十三章)に無言行道の事云々。報恩院御口伝と。此の説に同じ。又『十三卷』の第二説に云く、地藏院法印の説に云く、加持の義これを存すべし。小金剛輪の明を誦するなりと。元祖の小金剛輪の真言を誦せずと云うは、実に無言の意なれば此の説に依らざるか。地藏院流にて此の説に依るか。

正流無言』 洞泉和上の云く、正流とは西院なり。彼の流は独古のサキを頭指にソヘテ、下に向けてこれを持す。出入の息を^云と観じて行道す。実に無言なり。下に向け持するは地輪を加持する意なり。他流は真言を誦す故に無言行道に非ずとこれを斥と。

醍醐は小金剛輪の真言を誦すれども、口内にて声を出さざる故に無言と云うなり。小金剛輪の言を誦れども、輪壇を成ずる意なり。

高座加持 本説慥かならざるなり。

火舎蓋 大壇のサハリに乱する故に。醍醐は打鳴を用れども別して小なるを用う。且つ早く打つ故に、大壇のサハリに乱することなきぞ。

切灯台 元は竹を切り下に足を付け、上に土器を置くなり。今は木にてこれを造る。灌頂の讃所の灯台の如し。

〔袖内結印〕『准胝軌』（金智訣、八左）に契を結ぶ時、衣をもって手を覆い、人をして見せしめ勿れ。『開心秘決』

八（大日の下）此の一科に依るや。仁和は左の神内、小野は右の袖と。

註1 密述力士 金剛の武器を持つて佛を警護する夜叉神、金剛杵を手にする者（『仏教語事典』解説。密述金剛と那羅延金剛は仁王として馴染まれている。

註2 サハリ 砂張 銅を主とし錫・鉛を加えた合金 椀形に作り磐の代りに使う。

〔作法集〕

孔雀經御読經發願 一日作法 三十一

宣陽門院日蝕御祈

（unio）
承元四年十二月一日

内題 孔雀經御読經 一日作法

先ず諸僧参会

次に導師經の上巻を持して佛前に進み、香呂を取つて三礼 香呂を置く。

登礼盤

次に金 二打

特 別 寄 稿

訓下・加註 作法集伝授要意 元瑜編（4）

稿 寄 別 特

次に唄 云何

次に散華 毘盧遮那 対揚 これ無し

次に金 一打

次に表白

敬つて真言教主大日如来両部界会諸尊聖衆 殊に別しては本尊聖者三世佛母大孔雀明王 摩訶摩更利耶甚深妙典
八萬十二法界等流權実正教 惣じては盡空法界一切三宝の境界に驚かし白して言さく

今娑婆世界南瞻部州大日本国禪定仙院

一心の叡慮を抽でて三業袖襟を専らにし

六口の浄侶を屈して三世佛母の妙典を転読しまれます事あり 御願の旨趣如何となれば夫れ以つて転禍為福の計り
ごとは秘密真言の威力には如かず、息災延命の道は専ら孔雀明王の本誓に在り これに依つて日蝕の厄難を除いて
天変の災夭^{オウ}を拂んが為に 仙洞の佛殿を擺^{ツバハ}つて佛母の妙典を転読し玉う所なり 今此の経王は種智還年の良薬不
老不死の秘方なり 七佛慈氏は同じく神呪を説て受持の人を護り 四天王は共に擁護を致して読誦の所にイ^タむ
是をもつて晝夜常安と説いて 誓多林の金口豈朽ること有らんや 壽命百年を演ぶ 給孤蘭の誠諦実に憑しき哉
若し余れば禪定仙院 玉体堅固にして金石に相同じく 宝寿長遠にして松栢に異らざらん 凡そ院内安穩諸人快樂
乃至法界平等利益 謹しんで発願す

発願 経を取り 金一丁

至心発願 皈命転読 大孔雀経王

特 別 寄 稿

功德威力 天衆地類 倍增法樂

倍增威光 護持仙院 消除不祥

不祥災難 天変恠異 未然解脫

玉体安穩 增長宝寿 無辺御願

決定円満 院内安穩 諸人快樂

及以法界 平等利益

次に五大願

次に一切諷誦 一丁

次に衆僧読経 導師暫く読み退下

次に卷数を満しての後卷数を書く

正文をば楮に付け 佛の左右に立つ。案の文をば脇机にこれを置く

次に導師佛前に進み 今度は経の下卷を持つ

次に札盤に着す 小時読経

次に金 一丁 止経の為なり

次に卷数の案を読む

次に香呂を取って補閑分の由を申す 云く

五口の僧綱大法师等殊に精誠を致し経王を転読すと雖も、凡夫具縛の身なれば文字章句謬り多く 余念散乱相交わ

特 別 寄 稿

らんか 仍て如法如理の転読となつて御願決定成就の為に

摩訶毘盧遮那佛名 丁

釈迦牟尼宝号 丁

大孔雀明王 丁

次に神分（奉送の句有り 転読経王の所 息災延命の砌）

次に小祈願

次に供養浄真言

次に六種

次に呪願を乞う 云く

敬礼常住三宝嘆佛呪願_云

次に対揚 香呂を取り起居常の如し

南無逝多林中経王教主釈迦尊

正法威光護持仙院

十方三世塵刹土

円満十二殊勝願

還念本誓求影向

天災地天令消除

無量災難未然解脫

南無護持仙院增長宝寿增長宝寿

院内安穩諸人快樂

天下安穩万民豊楽

次に安座 佛名

南無三世佛名大孔雀明王

經王威力 護持仙院

大悲護念成御願 金一二

承久三年十月十六日
(三三三)

宣陽門院月蝕の御祈 师主御手替りにこれを參勤す。此の草別御本これを始む 啓白等皆此れを定んでこれを用い了る

金剛佛子 憲深

読経衆

尊祐阿闍梨 利信^{成イ}大法师

豪俊大法师 頼賢大法师

〔伝授要意〕

¹ 孔雀經御読經

此の作法は、承元四年十二月一日、²宣陽門院³日蝕の御祈に成賢これを草し玉う。其の後承久三年十月十六日、宣陽門院月蝕の御祈に憲深手替（成賢の手替）御勤めなり。全く此の本を用う。只表白の日蝕の「日」を「月」に改む分なり。日の傍注の月字是れなり。

〔持經上卷等〕 經を持ち香呂を取り添えて三札なり

卷^{カス}数を満じての後卷^{ジュ}数を書く。

〔立佛左右〕 左なりとも右なりとも、一方に立つるなり。両方にはあらず。

〔有奉送句〕 四度の時の結願の句に似たる故に奉送句と云う。

〔南無護持仙院等〕 此の護持の句は二反唱る故に下に「增長宝寿」と云うなり。

註1 孔雀經 孔雀經を所依として息災・祈雨等に修し、廣沢方の最大秘法としている。經法として功德について、『孔雀明王軌』に世間の諸々の災難に合った時「若し此の法に依り、是の經を転読せば、一切の災難皆消除することを得、所有の願求意に隨つて満足す」と説く。（正藏¹⁹四三九c）

註2 宣陽門院 後白河天皇皇女、勤子 建久二年（一一九一）女院となる。元久二年出家、法名性円智^{（二八）（二五）}

註3 日蝕 日や月が欠けることは天変として怖れられた。『禁秘抄』（建保元年成立の有識故実書）に「天子には殊に其の光を当てず」とあり、天皇に弱った光が当たたらぬよう防護し、未明前から諸臣は参籠し、護持僧が読經を行つて玉体安穩を祈った。

日蝕も同じ。（『日本歴史大事典』解説文取意）

宣陽門院は土御門天皇の為に祈願を行った事例がここに示されている。

〔作法集〕

芥子作壇略作法

五色加持
破壇作法

三十一

内題

作壇作法

先ず鋤印言

軌に云く、金剛縛にして禪智を豎て、進力を並べ豎てよ

真言 二十一反

ニキヤダハソテイ
ウレハハソテイ

次に加持泥印言

ム云 馬頭印言なり

軌に云く、二手合掌して進力戒方を屈して二節相い合わせて、禪智を並べ豎てて進力を去つて口の形の如し 真言

二十一 反

アマリトドンバウンハツタ
方列を不有交る人

次に五色系印言

大金剛輪印言なり
或は火輪の印の如し

已上三箇印言は、着座最初に而も以つてこれを加持すべし。然かる後作法に入るべし。

○ 五色加持真言

特 別 寄 稿

バザラシッタサンマヤウン
 ンテサマヤンニサマヤン

唵嚩日羅質多羅三摩耶吽

。或は五胝印外
 アラランキヤマカ
 ンテサマヤンニサマヤン

破壇作法

小野僧正抄に云く、壞壇の時妙觀察智の印に住して

觀ぜよ。大壇の中に列字あり。此れ地輪の種子なり。此の字變じて大壇となる。

法然道理の所作なり。また「列」字あり。變じて大風輪となる。即ち地輪を吹き破るいわゆる成は必ず壞なり。即ち頌に曰く

諸法從緣生 如来說是因

是法隨緣滅 是大沙門說

三反誦し畢つて即ち炉の右の辺を壞し これを損壞し始む。

〔伝授要意〕

1 破壇略作法

五色
 破壇――

此の次第は成賢の記にして略作法なり。本法は土壇炉も土にて塗るなり。謂く壇場の処三尺土を除き、清淨の土をもつて壇を作る。其の土を鋤の印言にて二十一反加持し、其の後自ら鋤を取り言を誦じて壇を作る。其の時加持泥の

印言をもって加持す。七日の間この如くす。此の中央に炉の形、三形等を作り了えて楸を立て糸を引く。其の時五色加持の印言を用う。今時は木壇にて但炉のみに土をもって塗るなり。而も本作法に順じて此の三箇の印明を結誦するなり。大いに略儀なり。金の炉、石の炉尚をもつて略なり

² 軌云 『瑜伽護摩軌』(左)

大金剛輪印言 此れは輪壇を成ずる意なり。若し師説に准ぜば、五色系の印言は、次の五色加持の真言等か。

破壇作法 『護摩達磨』(二十八)の意なり。

註1 略作法 性善の『作法集口伝』にこの作法の太要を説明した後に、「廣作法は『妙抄』に出す。」とある。印融の口訣にも同様で、本拠の実運の『諸尊要集』第十四の護摩雜要の項の文の大意を引いている。これは大谷覚俊阿闍梨の伝と同書に示している。

(正蔵⁷⁸三三一九b)

註2 『瑜伽護摩軌』 正蔵^{九〇九}(18)九二一b

歟真言の二字目の^々は藏経では^々とある。次の加持泥真言の表記も、四字目の^不が^了と相異する。

〔作法集〕

大法護摩壇作法 三十三

内題

大法護摩壇作法

特 別 寄 稿

大阿闍梨振鈴の後、護摩師先ず本座に於いて護身法。次に座を起つて護摩壇の前程に至つて蹲踞して幔を挑げて入り、護摩壇に至りて先ず大壇の方に向つて三度礼し、了つて礼盤に昇る。

次に着座

次に塗香 此の時念珠一古脇机に置くべし。

次に三密・浄三業・三部・被甲

次に二器香水加持

次に洒浄

次に加持炉口

次に補闕

次に羯摩加持

次に大日加持

次に三平等觀

次に芥子加持

次に火天印明

次に火天真言 百反

次に入護摩

火天段等次第にこれを行ず

次に世天段 撓遣の後三古を本の如く金剛盤の上に置く

次に独古を取り下礼盤

次に前の如く大壇の方に向つて三度礼し了る

次に本座に着す

〔伝授要意〕

内題

1 大法護摩壇作法

此れは²離壇の護摩にして、即ち護摩師の要意なり。

〔蹲踞挑幔入〕 大壇と護摩壇との間に幔を打つ。蹲踞してカカゲ入ることぞ。而るに今時は、中程を打ち違えて二枚引く故に、蹲踞して両手にて左右に引き分けて入るなりと云々

〔向大壇之方三度礼〕 護摩壇へ本尊を掛けざるが故に大壇本尊を礼するなり。

但し此の三度の礼は起居礼の故に、腰の折れぬように礼すべしと

〔大日加持〕 此の次に本尊の印明あるべし。是れ定たることなり。

註1 大法 例えば後七日御修法の如く、数種の異つた修法を一座の中に勤修する法要

註2 離壇護摩 供養法は大壇にて修し、護摩壇は別処に構えて別人が修す。伝法灌頂の中間護摩の如し。

〔作法集〕

咒願 三十四

内題

咒願 通用の咒願なり云

三宝徳海 不可思議

恒沙劫中 讃揚難盡

誦經咒願

誦經威力 摩訶施主

消除不祥 〇消除災難、

〇消除の左脇に二文字を消去したものか、ゝゝとのみ残っている。

心中所願 決定成就

檀波羅蜜 具足円満

過去の為の咒願

誦經威力 過去幽霊

往生極樂 檀波羅蜜

具足円満

金口

登礼盤 三礼 如来唄

表白 発願 四弘

次に金口偈

〔伝授要意〕

1 咒願

印融の云く、呪願に通別これあり。一切作善にて皆咒願師を用う。咒願は満願の義なり。

〔金口〕 師の云く、金口の偈、書写し或は読誦、供養する作法なり。印融の云く、「金口、登礼已下₂不審なり」と。已下は呪願の事と関^{アツナラ}ざる故に不審というなり。

3 〔金口偈〕 或は時我偈、或は世尊の偈、或は法身偈等なり。書写は二句、四句、六句、八句乃至長短意に任す。十反、百反、千反、万遍これまた意に任す。

而かる後この作法をもつて回向供養す。設い書写せざれども、反数を記して供養するなり。

註1 咒願 マントラを唱えることを原義とするが、法要において法語を唱えて施主の福利を祈願すること、また施主の願意を述べ成就を祈ること（『佛教語大辞典』と理解されている。この法文を諷誦するため、一座法要の役に「咒願師」がある。

註2 不審 印融（一四三九）の口訣に「金口登礼已下不審」と述べる。その理由として金口なるものは咒願と関連なきものと解した

特 別 寄 稿

結論と窺える。

註3 金口偈 性善（一七六三）の口訣では「此れは金口の偈を誦する供養作法なりと云い切っている。『要意』に示されている当項の文言は、性善の口訣の大部分を引いている。

〔作法集〕

泥塔供養作法 三十五

内題

泥塔供養作法

着座普礼等 常の如し。塗香。三密。浄三業。三部。被甲護身。加持香水。洒浄。加持供物。じ字観 常の如し等。開眼・啓白。神分。五悔。発願。五大願等。普供養・三力。地結。牆界

。道場観 如来拳印

観想せよ、我が身の前の大地の上にじ字あり、瑠璃の宝地となる 宝地の上に七宝の妙塔あり 其の数衆多にして其の量高廣なり 無量無遍の莊嚴微妙なり 虚空の諸天花を雨して供養す 宝瓶 闍伽 塗香 華鬘 焼香 飲食悉く皆周遍し 摩尼を燈とす 是の如くの廣大の莊嚴勝計すべからず 是の如く妙塔は皆是れ我が所造の泥土の小塔なり 諸佛の加持力と真言の功德力に依つて 変じて微妙廣大の塔婆となる。

七処加持

。供養明。送車。請車。迎請。馬頭。網界。火院。闍伽。華座。振鈴・五供。四智。普供養・三力。入我々入。塔印

明。念誦 佛眼

大日 延命 一字

。後供・圓向・撓遣

。又の作法

。先着座。三礼。如来唄。開眼

詞に云く 新願し給えり大日如来法身造立供養の三摩耶印形法身泥塔界心泥集 本有隨緣五眼心一無五輪心泥 四字無の功德具足せしめ奉らんが為に

佛眼の真言

五智の功德を円満せしめ奉らんが為に

大日の印

。表白。神分。發願。五大願。念誦。佛眼

大日 延命 一字

。佛名宝号を略す。供養真言。六種廻向

。表白。發願。四弘。次に金口の偈

〔伝授要意〕

泥塔供養作法

此れ普通の作法にして古き次第なり。丁寧には¹前の憲深の次第を用うべし。また作法は心覚の『作法集』第一に二説ある中後説に同じ。已前の作法は大同少異なり。

三力の次に大金剛輪無きは、是れ古き様なり。

我所造之泥土^{ソレガ} 若し施主あれば、まさに某^{ソレガ}所造と云うべきなり。

廣大塔婆 心覚の「泥塔の次第には、理智法身の内證隨縁の諸佛皆此の中に住するの句もあり。

供養明 大虚空蔵なり。

又の作法の下、²法身 心覚の『作法集』には「法界」に作り、「印」の字無し。五輪功徳の四字無し。恐くは好し。五輪即ち五智輪の故に此の徳は次の大日の印言の功能なり。佛眼、大日の印言常の如し。

佛名略宝号 所願成就の為摩訶毘盧遮那宝号、金剛手菩薩名と唱え 金一丁これを打つ。

次に金口偈 時我偈等なり。

註1 前の憲深の次第 これは前出の第二十、泥塔供作法を指す。(成佛研紀要第四十四号、十三頁参照)
註2 法身 傍註に「元々私に」とあり、作法集本文の朱付の箇所の説明を述べるための前置の詞。

〔作法集〕

¹修学土代 三十六

。表紙右上に

此の本員外なり。これを用うべからず

。表紙左上に

此の本野山の略本尤も恠しむべし。悉曇と戒行を除く。遺恨のことなり

内題

真言師沙汰あるべき事

一、自相^{サイ}

真言の自相は密宗の根本なり。先ず祖師の正流を尋ね相承の口決を面受すべし。其の上廣く本書、抄物を勘見して所伝を潤色すべきなり。十八道、両界、護摩、灌頂（結縁・伝法）大法、小法並びに作法等（御衣木加持等なり）各々玉を瑩き鏡に懸けよ

一、教相

宗義の教相とは、源と大日經の疏並びに大師御作等より出で、また諸師の製作多くこれあり。深く真言の義理を探つて専ら大師の意趣に叶わば、滅罪生善の紹隆密教の要 何事かこれに如んや

一、目録

正教の目録は教網の大綱求道の指南なり。貞元録 八家秘録 各別の録 所学の録等部類を分けて時代の事を弁えよ。稽古本^{モト}い学道の要なり。中ん就いて道具 法門 佛像 舍利等第、家、の有無彼此の多少 分明にこれを覚悟すべし。また譯者、請来分明ならざる本書等これ多し。真偽未決にして魚魯混合せり。必らず先達に遇い不審を開くべ

特 別 寄 稿

特 別 寄 稿

し。また成尋^{ジョウ}（一〇〇一）^{チヨウ}齋然（九三八）^{一〇六六}等新渡の書籍目録これあり。委くこれを檢知し真偽を弁うべし。

一、血脈

密宗の習は血脈相承をもつて其の本と為す。師資の血脈無くんば 誰かこれを信受すべきや 大師付法伝 海雲造
玄並びに我が朝の家の血脈 東寺 天台 小野 廣澤等分明に覺悟すべし。中就いて然かるべき自他宗の先德達の
稟承德行等覺悟せずんば遺恨の事なり

一、支度 卷数

末代真言師 先德の支度、卷数をもつて規模となすべし 但し書き様古今相違する事あり。これを分別すべし。ま
た一法に於いて、修法 護摩 華水供各別なり。能々存知すべし

註1 修学土代 この一本は、表紙左右の上部の記事及び後出の『伝授要意』の評釈により、原本の文のみを収録する。『伝授要意』
の口決は、次の欠落無き一本の本文の後に示す。

〔作法集〕

修学土代 三十六

内題

真言師沙汰あるべき事

一、自相

真言の自相は、密宗の根本なり。先ず祖師の正流を尋ね、相承の口決を面受すべし。其の上に廣く本書抄物を勘えて所伝を潤色すべし。十八道、兩界、護摩、灌頂（結縁、伝法）大法 小法並びに諸の作法等（御衣木加持等なり）各玉を堂き鏡を懸けよ

一、教相

宗義の教相とは、源と大日經の疏並びに大師の御作等より出でて、また諸師の製作多くこれあり。真言の義理を探りて専ら大師の意趣に叶えり。滅罪生善紹隆密教の要何事かこれに如からんや

一、目錄

正教の目錄は教網の大綱求道の指南なり、貞元の録 八家の秘録 各別の録 所学の録等部類を分て時代事を弁へよ。稽古の本と学道の要なり。中就く 道具 法門 佛像 舍利等第々家々の有無彼此の多少を分明にこれを覺悟すべし。また譯者請求分明ならざる本書等これ多し。真偽未決にして魚魯混合せり。必らず先達に遇うて不審を開くべし。又成尋^{デッケン}齋然等の新渡の書籍の目錄これあり。委しくこれを檢知して真偽を弁すべきなり。

一、血脈

密宗の習血脈相承をもつて其の本となす。師資の血脈無くんば誰かこれを信受すべきや。大師付法伝 海雲造玄並びに我が朝の家々の血脈 東寺 天台 小野 廣澤等分明に覺悟すべし。中就て然るべき自他宗の先達の稟承德行等覺悟せずんば遺恨の事なり。

特 別 寄 稿

一、支度卷数

末代の真言師は先徳の支度 卷数をもつて規模となすべし。但し書き様も古今相違の事あり。これを分別すべきなり。又一法 修法に於いて、護摩 花水供各別なり。能々存知すべし。また大法の支度並びに用途の支度等兼て存知せず期に臨んで迷惑せば、甚だ不便の事なり。

一、日記先例

修法する所の先例御願の旨趣等、国史並びに家々の日記普くこれを勘うべし。後代の修する所先例を守るべき故なり。兼て先代所修の吉凶 法驗 勳賞等の有無 人々の失乱等尤もこれを尋ね知るべし。前車の覆後車クツカエルの誠なり。且は賢を見て等しからんと欲う故なり。

一、図像

図像の沙汰は事廣博にして輒くこれを極め難し。八家請来の図像を根本となし、先徳の證本並びに唐本の佛像等これを集むべし。中就諸々の曼荼羅においては、委しく本文を勘え 現図に比較すべし。兼ねて所々の靈驗、所々の本佛等の由来これを尋ね知るべし。奥あることは是れ多し。

一、香藥

香藥は悉地成就の相応物なり。功能勝利尤もこれを知るべし。香藥の梵名、四種の法の相応尤も分別すべし。また香藥の和名は医家に訪ねこれを沙汰すべし。

一、梵字悉曇

梵字はこれ諸佛法イの本源、密藏の源底なり。故に先徳云く、悉曇を知らざる人は半真言師なりと云 此の道已に断

絶せり。密宗の陵遅何事ぞこれに如んや 悲しむべし

一、声明 法則

密宗の習は内徳に有りと雖も、外儀を闕けば遺恨のことなり。声明法則尤も具足すべし。内外相備うるは法成就の相なり。中就御前の修法等の時に外儀尤も大切なり。見聞仰信の因縁なり。能々習学すべきのみ

一、持戒 行業

縦い有智博覧の人なりと雖も、戒行無くんば冥の加護無く効驗無し。故に大師云く、若し病人に対して方経を披談するに救療に由し無し云 鎮国利民の本い断惑證理の要 戒行に如るべからざるものか。故に戒恵兼備し、智行具足すれば尤も人师国宝となるべし。

已上条々初心の人の為に思い出すに隨いこれを記す

東寺沙門 成賢

建保(一一二)六年五月十八日 遍知院に於いてこれを書す。

〔伝授要意〕

修学¹士代

師の云く、此の本、野山の本尤も怪しむべし。悉曇と戒行とを除き遺恨のことなり。洞泉和上の云く、「雜説に云く、悉曇を除く、高野明神のヲキライ故なり。悉曇を学ぶ者は貧にナルナリ。證拠安然後に貧になり、東寺の門前に草履を作りウルナリ。人々草履の名を問へば金剛という。草履に金剛と云うこと怪しきことなり。戒行また以ての外

特 別 寄 稿

キライナリ。是の故に二ヶ條これを除く」元型このことを按ずるに、尤も怪しむべき説なり。若し戒行をキライナラバ、新別墅を建て置くこと如何ん。また悉曇の事は、宥快の伝に云く、一夕丹生明神影を現じ玉う。快公悉曇余単重章名義を問尋し玉う。神即到具さに精決し玉うと云々。豈ヲキライナラン耶。雜記削るべし。慈順の仰せに云く、正本と対校するに、始めより能々存知すべしに至るは全同なり。また大法の支度已下は恐くは散失せるかと。此の御料理尤も隠当なり。

註1 土代 『広辞苑』に「書類の下書き。文書の草案」と解説しているが、この章の内容から見れば、真言行者の心得べき基本が述べられているので、建築物の土台に通ずる。即ち修学の基本を成賢は記述した章である。